

# マックス・ヴェーバーとハイデルベルク大学

——人事案件・教育活動・同僚たち—— (4)

野 崎 敏 郎

## 〔抄 録〕

バーデン政府は、ハイデルベルク大学国民経済学・財政学専任教官ポストの増設を決定し、ヴェーバーに伝える。これを受けて、彼は1900年初頭に正教授からの退任（降格）願を提出し、それにとまなう事後処理と新任人事をめぐって、政府と哲学部とのあいだで調整が活発化する。政府は、若手研究者の招聘を見込んで、新任教官の職階を員内助教授でも可とする意向を提示するが、これにたいして、ヴェーバーら哲学部側は、政府に提出した1900年3月8日付推薦書において、あくまでも正教授招聘が望ましいと主張し、4名の候補者を推挙する。

キーワード ヴェーバー、アルンスペルガー、ハイデルベルク大学

## I 序

## II 1896年のマックス・ヴェーバー招聘人事をめぐって

II-1～5

以上、第39号（2004年9月刊）所収

II-6・7

以上、第40号（2005年3月刊）所収

## III 国家学・官房学部門の開講科目とヴェーバー

## IV 国家学・官房学部門のスタッフ補強の試み

以上、第41号（2005年9月刊）所収

## III-3（補足・訂正） ヴェーバーの1898年7月16日付休暇願について

前回、第III章において、1898年夏学期末における講義の打ち切り<sup>(1)</sup>と療養について述べたが、このときヴェーバーが提出した休暇願が遺されている。これはヴェーバーの伝記的研究にとって重要な資料なので、ここに訳出するとともに、第III章の補足と訂正をおこなっておく。書簡の冒頭に、用件が「休暇願（Urlaubsgesuch）」であることが明示されている。

資料 III-① ヴェーバーの休暇願（1898年7月16日付）（GLA 235/2643）

ハイデルベルク大学教授マックス・ヴェーバーの休暇願

ハイデルベルク、1898年7月16日

大公国法務・文部省御中

拙下は、遺憾ながら、  
枢密顧問官クスマウル閣下<sup>(2)</sup>のご教示なさいましたコンスタンツにある「コンスタンツァー・ホーフ」<sup>(3)</sup>の医師ミュルベルガー氏による診断書を同封しまして、ご提案申し上げざるをえません、

今月25日より、療養のため、拙下にたいして休暇をご下賜いただくご意向であることを。

拙下は、本学期開始時より慢性的な神経性の不眠症に苦しんでおり、医学的見解によりますと、かねてよりの過労、くわえて（どうやら）マラリアに感染するにいたった模様であること、そして他の有害な作用によって、そうした状態になったとのことですので、拙下の教育活動はこうした有様にひどく難渋しておりました〔けれども〕、それは、現在にいたるまで——二日間の中断一回を除きますと——粛々と続けることが困難だったにすぎません。拙下において療養をこれ以上延期しますと、明らかに〔医師の〕助言に背くこととなりますし、また完全な回復が約束されておりますので、とくに拙下には講義〔単数<sup>(4)</sup>〕において話すことがますます困難になるでしょうから、もしも大公国貴省がご同意賜りますならば、次学期において完全に就労能力を回復するために、本学期の最後の二週間を犠牲にすることを選択すべきであると信ずるものであります。

敬具

教授・博士マックス・ヴェーバー

〔医師 F. Mülberger の診断書（Aerztliches Zeugniß, 1898年7月15日付）の本文〕

ハイデルベルクの大学教授・博士マックス・ヴェーバー氏は、過度の興奮および神経系の機能的衰弱に苦しんでおり、これらのため、今後も含め、いかなる職業的活動からも身を遠ざけておくことが切望される。

この書簡において、不眠に悩まされはじめたのが1898年夏学期開始早々であったことが明示されている。すでに1897/98年冬学期末に変調を感じていたヴェーバーは、レマン湖畔で休養した後、1898年夏学期の授業が始まる直前の1898年4月14日付書簡では希望的観測を述べていた。しかし、すぐにまた不眠に襲われていたのである（LB 1：248, LB 2：270）。

医師ミュルベルガーの診断結果から、過労・マラリアその他に起因し、体質に潜在していたものが不眠というかたちで顕在化したとヴェーバーは推断している。前年における父との衝突と父の死とがその背景にあるらしいことは多くの論者が語っているが、それは「他の有害な作用（andere schädliche Einwirkungen）」のなかに入れられている。休暇願という公文書中の記述なので、そうした私事を書くことはなかったのであろうが、この休暇願中でそれが主因とされていないことは、事実として確認しておくべきであろう。

こうした困難に直面しながら、ヴェーバーは休講二日のみで持ちこたえてきたが、これ以上療養に入る時期を遅らせると、冬学期にまで差しつかえると判断し、夏学期の講義を最後の二週間分だけ端折ることに決めたのである。しかしそれでもなお冬学期の開講までに十分恢復しなかったため、彼は、滞在先のコンスタンツから10月5日付で哲学部にたいして休暇延長を申請しており (UAH/PA 2408)、そのさい新たな診断書を添えている (GLA 235/2643)。

この経緯にかんするマリアンネの記述は奇妙なものである。彼女によると、1898年夏の療養時に、ヴェーバーはもっと長い休暇を望んだが、彼はそのようなことを口にせず、「やはり私は自分に休暇が与えられるようみずから仕向けることはできなかった」と語ったという (LB 1: 248, LB 2: 270)。しかしこの引用符付の文がどこからの引用なのかは不明であり、また彼が休暇取得をこころみなかったかのように装うこの記述は、どうみても事実に反している。彼は、1898年夏学期の授業を切りあげて休暇に入ることをみずからバーデン政府に申請しており、さらに10月にはその休暇の延長をみずから哲学部に申請している。マリアンネが与えている文脈から、この箇所の「休暇」は、この夏だけの休暇を意味するのではなく、一学期まるごとあるいはそれ以上にわたる長期休暇を想定していると解しても、なお納得のいく説明にはなっていない。彼女は、ヴェーバーの休暇申請を過小に描こうとしているようだ。

7月25日からさらに二週間分の講義が予定されていたことから、ヴェーバーは、当初、8月5日 (金曜日) まで講義をおこなうつもりだったことがわかる。ハイデルベルク大学のこの学期の正規の終講日がいつだったのかは不明だが、他の大学の記録から類推して、8月第二週とみられる。実際には正規の終講日より早く講義を終えてしまう教授がいたし (前回分23頁注(5))、とくに夏学期の場合、8月の暑さを嫌って、あらかじめ正規の (4月の) 講義開始日より早く講義を開始し、8月は早めに講義を終える教授がすくなくなかった<sup>(5)</sup>。したがって、ヴェーバーが当初予定していた講義日数 (回数) は標準的なものだったと思われる。

1898年夏学期の講義は二つあり、二週間端折ったので、週五回の「一般的国民経済学」は10回10時間分、週一回の「労働問題と労働運動」は2回4時間分削減したことになる。休暇に入るのは、名目上は7月25日からだが、この日は月曜日なので、事実上、前週金曜日 (7月22日) 11~12時の「一般的国民経済学」を終えた後すぐに療養に入ったのであろう。

講義と演習とでは、講義の遂行のほうに大きな困難が生じている。このことはマリアンネによる伝記にも記されているが (LB 1: 252, LB 2: 274)、ここに訳出した書簡から、初期においてすでにそうした傾向があったことを確認できる。これにたいして、後年のミュンヘン大学における教育活動のなかでは、むしろ演習に大きな困難が生じていたことを、同大学の元ゼミ生が証言している (亀嶋庸一編 2005: 57)。ここから、ヴェーバーの疾患は、その初期と後期とで異なった症状を呈していると推断できる。この書簡の時点から彼が亡くなるまでの22年間において、単純に症状が重くなったり軽くなったりしているのではなく、疾患の様態そのものに変化・変質が生じていた可能性がある。ここに訳出した書簡は、あくまでも発病初

期における症状を、医師の診断結果を参考にしながらヴェーバーが自己分析した記録である。

以上で第 III 章の補足と訂正を終え、前回掲載の第 IV 章に続き、第 V 章に移る。

〔注〕

- (1) 前回、関係文書のローマ数字を見誤ったため、講義の打ち切り時期を「6月25日」と書いていたが、正しくは「7月25日」である。
- (2) 内科医アードルフ・クスマウル（1822-1902）は、エアランゲン、フライブルク、シュトラースブルクで勤務した後、1888年に教職から退き、以後亡くなるまでハイデルベルクに住んでいた。枢密顧問官の称号を得たのは1891年である（Doll 1935）。
- (3) 添付されている診断書には **Konstanzer Hof Heilanstalt für Nervenkrankte** と印刷されている。
- (4) この学期に担当していた講義は二つあり、次の1898/99年冬学期にも二つの講義が予定されているから、この箇所の「講義」が単数形なのはいくらか妙である。ただ、冬学期に予定されていたうちの「貨幣・銀行論」は結局開講されなかったから、この箇所、ヴェーバーは、冬学期に開講する「実践的国民経済学」講義のみを念頭に置いていたのかもしれない。
- (5) このことはカール・ラートゲンの学生時代の書簡からわかる。学期開始当初（通例一週間ほど）は受講登録期間に充てられ、その後講義が始まる段取りになっているのだが、1879年夏学期にライプツィヒ大学に転じたラートゲンは、同年4月22日付父宛書簡において、講義は28日（月）に始まるはずなのに、多くの教授たちは24日から講義を開始すると記している。そして8月4日付父宛書簡では、8日（金）に講義が終了する予定だと伝えている（両書簡ともバルトホルト・C・ヴィッテ所蔵）。また、当該のハイデルベルク大学における「一般的国民経済学」を1886年夏学期に担当していたカール・クニースは、土曜日も含めて週六回設定したうえで、5月3日に開始して7月31日に終えている（八木紀一郎 2004：140）。

## V 1900年のカール・ラートゲン招聘人事をめぐる

### V-1 ヴェーバーの最初の退任（降格）願とその付帯書簡（1899～1900年）

#### V-1-1 1899年12月27日付の「問い合わせ」および1900年1月7～8日付の三通の書簡

マリアンネによると、ヴェーバーは1899年のクリスマスに退任願を提出したが、文部官僚ルートヴィヒ・アルンスペルガー<sup>(1)</sup>が彼を慰留し、退任願は受理されなかったことになっている（LB 1：255, LB 2：277）。しかし退任（降格）願の提出日は1899年末ではないし、これにたいする政府の対応はそう単純でない。このことはバーデン政府に保管されていた文書から明らかだが、マリアンネによる伝記には、政府や大学の公文書を利用した形跡がない<sup>(2)</sup>。彼女は、こうした事項にかんして、どうも自分の記憶のみに頼って記述を済ませたようだ。

ヴェーバーが1900年初に提出した退任（降格）願およびこれに関連する書簡類<sup>(3)</sup>を紹介する。以下に「バーデン政府高官宛」としている書簡は、いずれも封筒を欠いているため、誰に宛てられたものなのか判然としませんが、ヴィルヘルム・ノック、アルンスペルガー、フランツ

・ベーム(1861-1915)のいずれかであろう。なかではアルンスベルガー宛である可能性が高い。「バーデン政府宛」としている書簡は、バーデン大公国法務・文部省宛である。

まず、1899年12月27日付書簡を紹介する。この書簡には——当時の体調の悪さを反映しているのであろうか——文章が破綻しかかっている箇所が散見されるので、そうした箇所はキックー(〔 〕)で補って訳出する。

資料V-① 第二教授ポストの設置にかかわるヴェーバーの「問い合わせ」(バーデン政府高官宛、1899年12月27日付)(GLA 235/3140)

ハイデルベルク、1899年12月27日

枢密顧問官殿

歴史委員会会合の折に国務大臣殿が拙下にお許しになりました話し合いのさいに、大臣閣下の——もちろん付随的な方たちでのみ表明されたものではありませんが——ご意見は、本学の国民経済学第二教授ポストの設置が見込まれているというご趣旨だと理解いたしました。しかし、予算につきまして、拙下はこれにかんする要求をもっておりません。

もしも、たとえば——その当時まだ分離されていなかった古い哲学部に属していた——ブレンゼン<sup>(4)</sup>の教授ポストを国民経済学第二教授の創設に充てることが見込まれているかのよう〔目算を立てていいのか〕、それにもかかわらず助教授ポストの新設でよいとされなくてはならないのかを、いまたしかにお聞かせ願えますならば、それは私共〔＝哲学部〕にとりましてもっとも大きな関心事でございます。

あいかわらず健康状態が思わしくないために生じる特殊事情にあつて、拙下の休暇中に、寛大なご返答——もしもそれがいま可能でしたら——を賜りますようお願いすることをお願い申し上げます。閣下に直接お会いしてわが身についてご説明したかと存じており、それゆえ〔いままた面会して口頭でお尋ねすると〕書状による問い合わせによるよりも強い調子で無作法にならないかどうか案じたのでございます。〔したがってこのように書状をもちまして問い合わせをなした次第です。〕

閣下に心からのご挨拶をもちまして 真に恭順なる

教授マックス・ヴェーバー

マリアンネが言う「1899年のクリスマス」に提出された退任願とはこの書簡のことであるが、これは退任(降格)願ではなく、「問い合わせ(Anfrage)」という性格のものである。この書簡のなかで、ヴェーバーは彼自身の退任にはまったく触れていない。

バーデン歴史委員会の席上、彼は、国務大臣兼法務・文部大臣ヴィルヘルム・ノックと直接言葉を交わしている。そのときの話し合いの内容を前提としてこの書簡が書かれているため、

話し合いの内容を知ることができないわれわれとしては隔靴搔痒の感を免れない。ヴェーバーが直截な表現を避けていることもあって、なにか意を尽くしていないようにもみえる。

ひとつ明らかなことは、前回分（第Ⅳ章）でしめしておいたように、正教授ポストを増設するのか員内助教授ポストを新設するのかの分岐点にあるのがこの書簡の時点だということである。そして政府側の意向をはっきりとしめしてほしいというのがヴェーバーの「問い合わせ」の趣旨である。1890年に哲学部から自然科学・数学部が分離・独立する<sup>(5)</sup>よりも以前のブンゼンのポストが話題にされているのは、おそらく、ノックとの話し合いのなかで、1890年の新学部設置時に哲学部の教授ポストが大幅に削減されていたため、そのポストの復活という名目で国民経済学・財政学正教授ポストの増設を正当化できるかどうか話題に上っていたためであろう。またこのことは、前々回（Ⅱ-7）において強調したように、国民経済学ポストの問題が、学部改組の問題と密接に係わっていることを示唆するものでもある。

つぎに、1900年1月7日付の二通の書簡と翌日付の追加書簡と<sup>(6)</sup>を検討しよう。

資料 V-② ヴェーバーの退任（降格）願①（バーデン政府宛、1900年1月7日付）（GLA 235/3140）

ハイデルベルク大学国民経済学教授の件

ハイデルベルク、1900年1月7日

大公国法務・文部省御中

拙下は、

謹んでお願い申し上げます、

陛下におかれましては、なにとぞ拙下の免官をご提案なさいますように（官吏規則第6条）。

大学教授職とりわけ正教授ポストの占有は、強靱な労働力を必要といたします。前学期すでに、および本学期も同様に、大公国貴省の余りあるご厚情を必要としてきた後、それにもかかわらず、いまなお、拙下の職務に不可欠な労働力を持続的に回復するためには、おそらくすくなくともおよそ一年間の職務完全休止を要すると思われるような健康状態にございます。正教授職補任のかかる休止は、大学の利害の観点からみて、拙下には耐えがたく思われますし、また拙下のように若い官吏が、これほど分不相応な優遇措置を要求しようとするのは不適切だと考えます。したがって、新鮮な力をもってこのポストの新人事をなすことが、唯一最終的でそれゆえ適切な解決策だと拙下には思われます。拙下は、当学部には許可されている私講師団に入るのが免官の当然の結果だと考えます。

もしも——拙下の希望通り——拙下の後任の着任まで——したがって見込みでは本年秋まで——拙下を当職にとどめておくことを貴省が可能とお考えになるのであれば、そのときま

で、拙下は、国民経済学ゼミナールを続行できるでしょうし、たしかにいますでに本学における拙下の活動の重点はゼミナール指導に置かれており、また目下のところ本学内で任用できる諸氏のなかには、ゼミナール指導の適格者はひとりもないと考えており、そこで、ゼミナール授業の弱体化は防止されるでしょう。このことは、ゼミナールのために大がかりな課題論文に取りくませている約三十名の諸氏の利益に適うでしょうし、拙下にとっても、学生たちをただもう見捨ててしまうよりも好ましいと思います。また、ゼミナール活動にあっては、仕事の時間配分を完全に自由に動かすことができ、この活動は、拙下にとって、たしかに可能かつ問題のないものであり〔さすが、これにたいして〕、これまでの経験から、決められた時間にきっちりと拘束された講義の遂行だけは、当分のあいだなしえませんが、これにかんする夏〔学期〕における代行のために、拙下の俸給を——もしも拙下が秋まで当職に置かれるならば——経費の補填のために大公国貴省の便に供します<sup>(7)</sup>。

大公国貴省にたいして、バーデンにおける服務期間中たえず貴省より最高度に賜りました実務上のまた拙下個人にたいするご支援に謹んで感謝申しあげてことを怠ることはできないがゆえに、貴省に心からのご挨拶をもちまして

敬意を込めて 真に恭順なる

教授・博士マックス・ヴェーバー

資料 V-③ 退任(降格)にかんするヴェーバーの書簡①(バーデン政府高官宛, 1900年1月7日付)(GLA 235/3140)

ハイデルベルク, 1900年1月7日

閣下

拙下は、本日この書状と同時にを送りいたしました免官願を、その請願書中にしめされている以上になおいくらかくわしく根拠づけたく存じます。

すでに10月に口頭で閣下にお伝えいたしましたように、講義の遂行を代行させること、および、それ自体は非常に緊密なものではありますが、拙下にとっては目下のところ——確定された時間にごくわずかばかり拘束されている〔にすぎない〕ために——比較的容易に遂行できるゼミナール指導の仕事に拙下を制限すること、こうした切迫した事態が再三生じ、講義はこの事態に見舞われております。バーデンにおいて個人的な諸問題の処遇にさいしてつねにとられてきたあのご厚情あるやりかたで、——これまでまったくもって十分な休暇においてさえ短期間回復されたにすぎなかった——活力の回復に向けた長期にわたる休暇が拙下に許可されることもありえないわけではないことを、閣下はいまたしかに拙下にしめされました。ただしこのことは、事の成り行きからして、本学に新設される予定の第二ポストの

任命の後の時期にのみ関係しうることでしたし、またこのことは、すくなくともそのときまで拙下がみずからのポストを完全に占有することが可能だということを前提としております。本年夏〔学期〕においてまたしてもゼミナールのみに制限され、そのさいそのうえになお休暇に入り、こうして、すでに二学期続いている暫定的な状態をさらに二～三学期継続させるということは、授業の利益の点から、拙下には耐えられないことでございます。

また、もしも——そう見積もられているように——新設される予定のポストがたんに助教授職にすぎないのであれば、その区分自体はこの事柄にとって決定的なものではないのかも知れませんが、暫定状態のこうした性格は、外面的には特別にそして極度に際立ったものでありましょう。——他方、すでに次の春から始まる賜暇は、よりによって、ゼミナールにおいて拙下のもとで学術研究をしている専攻学生たちにもっとも重大な不利益を与えるでしょう。それゆえ、拙下の請願は——現状では、また少数の人々にも——あらゆる利害にもっともよく適合していると考えます。また、〔哲〕学部も、客観的に、この見解に耳を傾けないわけにはいかないだろうと考えます。拙下個人にたいする配慮によって、同僚たちが、どっちつかずの措置を取りはからうかもしれないと懸念しなくてはなりませんので、拙下は前述の見解に疑念を抱いておりません。拙下には、——若い時期に、また十分な融通性をもって「最初からやりなおす」ために——ある種の冗職に就くことは不可能だと思われます。

もしも新設される予定のポストが助教授職であるとすれば、場合によっては拙下をこの職に就けるべきであるのかどうかを熟慮してみました。拙下個人としては、——先行する長い療養の後には——この職への就任はまったく受諾可能なものです。ただし、たとえ決定権のある諸官庁がこうした成り行きにおける特別扱いをこころよく大目にみるとしても、それで拙下が不在のあいだに生じる状況は同様に好ましいものではありませんし、また拙下はこのように他の人々の邪魔をしたくはありません。

したがって、閣下には、拙下の請願にご同意賜りますようお願い申しあげ、また拙下は、これによって生ずる事態にかんして想定される<sup>あいたい</sup>相対協議において、閣下か担当部局長氏といつでもお会いできるよう準備しつつ、

閣下に心からのご挨拶をもちまして

敬意を込めて 真に恭順なる  
教授マックス・ヴェーバー

資料 V-④ 退任（降格）にかんするヴェーバーの書簡②（バーデン政府高官宛，1900 年 1 月 8 日付）（GLA 235/3140）

ハイデルベルク，1900 年 1 月 8 日

閣下



拙下は、

前月27日付の問い合わせにたいするご厚情あるご返書にたいして謹んで感謝申しあげ、拙下がこの間(昨日)お送りした退任願が、正教授職と助教授職のどちらが設置されるのかという問いと外面以上の関連を有しているかのようにお受けとりになることがもしかすると生じたかもしれず、[この書状では]ただそれを防いでおきたいと思います。大学にとってたしかにいかなる場合でも望ましい正教授職の設置は、もうひとりの正教授の万一の休職〔による悪影響〕を外面上はたぶん軽減いたします。しかし、拙下の考えでは、これまでとられてきた手段を、徹底的な熟慮ののちに拙下に納得させた決定的かつ内面的な数々の理由が存在するのでございます。

閣下に貴簡を賜りましたことにたいしてあらためてお礼を申しあげ、閣下に心からのご挨拶をもちまして

敬意を込めて 真に恭順なる

マックス・ヴェーバー

#### V-1-2 1899～1900年におけるヴェーバーの健康状態と活動状況

これらの書簡中には、この時期のヴェーバーの健康状態にかんする重要な情報がいくつか盛られている。まず、自分の職務に不可欠な労働力を回復し、かつそれを持続させるためには、一年以上の職務離脱と療養とが必要だと判断されている。このことは、後述するように、1900年秋から本格的に休暇・療養に入った彼が、1902年夏学期から三学期連続して講義・演習の開講予告をしていることと符合する。一年余の療養によって、当初の見込み通り、彼は復帰できると(主観的に)判断して開講予告したのである(結局すべて取り止めにあったが)。

つぎに、ゼミナール演習はできるが講義は困難だという点がふたたび明示され、その理由として、前者は時間配分に融通が利くが、後者は決められた開始・終了時刻に拘束されていることが挙げられている。つまり彼は、時間拘束にたいして非常に脆弱な状態にあったのである。これにたいして、労働密度はあまり苦になっていない。三十名ほどの学生たちに論文指導をするゼミナール指導それ自体は「非常に緊密な(intensiver)」ものであるけれども、ヴェーバーは、指定された演習の時間割にはこだわらずに、自分と学生の都合におうじてそのつど指導している模様で、特定の時間に拘束されていないからこれは遂行可能なのである。このことは、これ以降の時期において、自宅で大学関係者・政府関係者とひんぱんに会見していることや、旺盛に論文を執筆していることと通底している。これらの活動自体は、場合によっては消耗しがちな激務であるが、時間拘束性の小さな活動だから可能なのである。

#### V-1-3 ヴェーバーはなぜこの時期に正教授退任の意向を表明したか

つぎに、正教授退任という彼の意向表明が何を意味するのかを吟味しよう。1899年12月27

日付書簡の時点において、ヴェーバーは、バーデン政府の態度表明を待つというスタンスをとっていたが、1900年1月7～8日付書簡になると、はっきりと——そしてここにおいてはじめて——正教授から退任（降格）する意向をしめしている。それは、1899年12月27日付書簡以降のある時期に、バーデン政府から（おそらくアルンスペルガーから）の返書（未発見）によって、国民経済学・財政学第二専任教官ポスト（第二正教授ポストまたは員内助教授ポスト）を設置する意向がしめされたからであり、この意向を受けて、ヴェーバーは、みずからの身の振りかたを決めたのである。そこでは次のような二つの事態が想定されていた。

第一のケースとして、もしも員内助教授ポストの新設が決定されると、ヴェーバー自身が（正教授から降格して）そのポストに就く可能性もあることはあるが、そんなことをすると、長期にわたって休暇中の——つまり満足に員内助教授の職務を果たすことのできない——自分が今後も大学に迷惑をかけつづけることになるとして、彼は明確にこれを謝絶している。したがって、員内助教授ポスト新設の場合には、レーザーがそのポストに就くか、外部から若手が招聘されることになる。そのうえでヴェーバーが休暇に入るか、あるいは正教授から退任すると、しばらくのあいだ、ハイデルベルク大学の国家学・官房学部門はレーザーか他の若手を中心として切りまわすことになるが、レーザーにあまり高い評価を与えていないヴェーバーにとって、それはいささか心許ないことである。現に、ヴェーバーは、退任（降格）願①のなかで、ハイデルベルク大学の現有スタッフのなかにはゼミナール指導の能力のある者はひとりもないと断言している。他の若手も未知数である。だから彼にとって、政府が員内助教授ポスト設置を決め、しかも自分の正教授退任とその後任の選定に手間取ることをもっともつよく懸念したのである。この最悪のケースを想定したため、もしも員内助教授ポストが設置される場合には、彼は、まずできるだけ早く自分の退任を大学と政府に認めさせ、自分の後任としてふさわしい人物を選定するための根回しが済むまでは、自分が正教授としてギリギリまで——自分の肉体の限界まで——職務を果たそうと決意していたはずである。

これにたいして、第二のケースとして、正教授ポスト増設が決定されるのなら、第二教授として能力の高い人物を招くことができれば、第一教授ヴェーバーは安心して退任し、療養に専念することができる。それから彼（第一教授）の後任を選定すれば、ハイデルベルク大学哲学部国家学・官房学部門の受ける利益はもっとも大きくなる。ヴェーバーの身の振りかたとしては、私講師への降格を希望している。この希望がすんなりと容れられるかどうかは疑問だが、第二教授の選定・任命は、第一教授ヴェーバーの去就とは手続き上無関係だから、かりに彼の退任問題をどうするかで大学・政府間で揉めたとしても、第二教授の任命を遅らせる必要はない。この場合、第一のケースに比べて、大至急自分の退任を政府に認めさせなくてはならないというほどのことはなく、それでもすみやかに退任するのが望ましい。

この二つのケースを想定し、とりわけ第一のケースを考慮し、とにかく専任教官ポストの増設方針が確定されたらすぐに自分の退任の意向を政府に伝え、まず員内助教授または第二正教

授を任命し、しかる後に自分はすみやかに休暇・療養に入るか退任するというのがヴェーバーの書いた筋書である。資料 V-③の書簡中で、自分の長期休暇等の身の振りかたは「第二ポストの任命の後の時期にのみ関係しうること」だと言っているのはこのことである。

こうした目算を立てていたから、彼は、正教授ポストにせよ員内助教授ポストにせよ、ともかくポストを増設するという政府側の内意を受けて、すぐに正教授からの退任を申しでたのである。また、哲学部の同僚たちが、ヴェーバーを気遣って、彼が退任しなくてもいいように「どっちつかずの措置」を講ずることが考えられるが、それでは結局大学や学生たちに迷惑をかけつづけることになるから、彼はこれを嫌い、すみやかに自分の退任を認めるよう政府に迫っている。このように、ヴェーバーの書簡から判明するのは、その驚くべき周到な深謀遠慮である。また彼が、自分の利益でなく、あくまでも大学・学部の利益を優先させてこうした判断をなしていることに敬服しないわけにはいかない。

ここにしめされているのが、自分自身の処遇と今後にかんするヴェーバーの意向であり、彼はこのスタンスを基本的に変えることなく1903年秋の正教授退任へといたる。われわれは、ともすれば、退任願を提出したというマリアンネの記述から、1899年末から1903年秋までのほぼ四年間、なにかヴェーバーがハイデルベルク大学の職務から完全に離れたがっていたかのように思いこみがちであったが、これらの書簡を読み、またこれらをあらためてマリアンネの記述と突きあわせてみると、彼は完全な離脱などぜんぜん考えていないことがわかる。彼が正教授を退任しようとしてよく希望しているのは、自分が正教授職に居座ったあげく基幹科目に穴を開け、哲学部がその後始末に追われ、また大学・学生に不利益を及ぼすという失態をこれ以上招かないためである。そして自分よりも責任遂行能力のある者に重要な職務を代行してもらい、自身は降格しながらもお可能なかぎりゼミナール指導や講義を分任しようとしているのである。したがって、筆者は、1899年末から1903年にかけてヴェーバーが提出した一連の書簡——それらのなかにはなるほど彼自身が *Entlassungs-Antrag* 等と称しているものも含まれているけれども——を「退職願(辞表)」とはみなさず、「(正教授からの)退任(もしくは降格)願」とみなす<sup>(8)</sup>。それがこれらの書簡にかんする正確な理解である。ここを見誤ると彼の意向を見失うことになる。この後の時期のいくつかの書簡(本稿中で訳出紹介する予定)にも如実に表されているように、彼は、ハイデルベルク大学にたいして自分が何をなするか、また大学が不利益を被らないように、むしろ大学の利益が最大になるようにするためにはどのように自分を犠牲にしうのかを<sup>つね</sup>に考えつづけていたのである。

しかもさらに、1903年秋の退任にあたって、彼はハイデルベルク大学との関係を絶とうとせず、それどころか可能なかぎり密接な関係を保とうと努めている(後述予定)。実際、この大学およびバーデン政府とヴェーバーとの関係は退任後も明確な<sup>かたち</sup>で持続するのである。正教授としての——とりわけ講義担当者としての——実質的な勤務期間は短いものであったが、彼は、大学・政府にたいする助言者として、正教授退任後も大学・政府と緊密な関係を

保ちつづける。その関係が終了し、彼がハイデルベルク大学から名実ともに退職するのは、じつに彼がヴィーンへと赴く **1918** 年またはミュンヘンへと赴く **1919** 年のことである<sup>⑨</sup>。ダグマル・ドリュルがヴェーバーのハイデルベルク大学在職期間を **1897～1918** 年としていることにはたしかに理由がある（Drüll 1986： 288）。この点からみると、マリアンネが、夫は「彼の王国から追放された」と書き（LB 1： 276, LB 2： 300）、あたかも **1903** 年秋にヴェーバーがハイデルベルク大学との関係を絶ったかのような主情的文章を綴っているのはたいへんまずい。その訣別感はその当時の彼女の心情にすぎないのであって、けっして彼の心情ではない。

## V-2 バーデン政府の方針提示と根回し

**1900** 年 **1** 月 **7～8** 日付書簡におけるヴェーバーの意向表明を受けて、政府は、ただちに事態の処理について検討しはじめる。マリアンネは、このとき、ノックとアルンスペルガーが、以前から懸案になっていた国民経済学・財政学第二教授ポストをこの機に設け、その教授にヴェーバーの任を肩代わりさせることにしたと書いている（LB 1： 254）。

こうした人事案と付帯事項処理案の試行錯誤の結果をしめすのが **2** 月 **24** 日付の省内文書である（GLA 235/3140）。筆跡は、アルンスペルガーが書きなぐったときのもので、ところどころ修正が入れられており、冒頭に「第 **859** 号」と書かれているから、第 **859** 号とすべき公文書の草稿であり、最後にノックが署名してこれに許可を与えている。第一頁の左上に「即刻！！」と記されており、また後出の推薦書において、第 **859** 号布達は同日（**2** 月 **24** 日）付であることが記されているから、この草稿は、その日のうちに浄書され、第 **859** 号布達として大学にしめされたことがわかる。前述のように、政府は、すでにヴェーバーにたいして第二ポスト設置の内意を伝えており、これを今度は哲学部にたいして正式にしめたのである。

この布達草稿の内容をかいつまんでしめしておく。アルンスペルガーは、このなかで、「われわれ」の「当人との話し合い」の結果について語っているから、**1899** 年 **12** 月 **27** 日付「問い合わせ」のなかで言及されていたヴェーバーとノックとの（**10** 月のバーデン歴史委員会における）会見に、やはりアルンスペルガーも立ちあっていたことを確認できる。ヴェーバーの意向は、国民経済学の第二ポストが不可欠で、そのための国庫支出も必要だという点にあることをアルンスペルガーは指摘し、問題は第二ポストを正教授ポストにするか員内助教授ポストにするかであり、それは畢竟「任命すべき人物による」としている。「それゆえ、われわれは、哲学部が、可能なかぎり急いで、当該大学の国民経済学の新たな代表者として——正教授としてであれ員内助教授としてであれ——俎上に上せうる人物〔複数〕を指名しようとするよう指示する」。つまり、職階を正教授にするのか員内助教授にするのかは人物次第で決めることとし、この点についてあらかじめ縛りをかけることを避けたのである。

これとともに、アルンスペルガーは、選定すべき人物像にも立ちいって指示する。そこで

は、すでに学界で指導的地位を獲得している正教授にのみ限定せず、「場合によっては——諸事情からみて——もう次の夏学期に、問題になっている部門〔国家学・官房学部門〕のもうひとりの代表者として獲得すべき有能な若い力〔複数〕をも考慮に入れる」ことを求めている。若い候補者の場合、正教授に任ずるには難があるかもしれない。そこで員内助教授もありうるという条件づけが意味をもつ。政府側が職階を特定しないのは、こうした若手研究者獲得のための伏線である。このように、政府の根回しは、学部側が推薦書を作成する以前に、学部において「こういう人物を候補者リストに入れろ」と指示するほど露骨なものであったのである。

### V-3 哲学部の推薦書(1900年)とヴェーバーの意向

こうして政府の意向は哲学部に伝えられた。学部から政府への推薦提案は四週間以内に提出するよう求められている。これを受けて、ヴェーバーを含む学部側は候補者の選定を急ぎ、以下に訳出する3月8日付推薦書を政府に送る。ヴェーバー色の濃厚な文書である。

#### 資料 V-⑤ 哲学部の推薦書(バーデン政府宛, 1900年3月8日付)(GLA 235/3140)

カールスルーエ, 大公国法務・文部省御中

ハイデルベルク, 1900年3月8日

ハイデルベルク大学国民経済学代表者の件

1900年2月24日付第859号布達における大公国貴省のご要請に従いまして、あらかじめ、哲学部の見解では、いかなる場合でも正教授の招聘が適切であるにちがいないということを強調すべきだと存じます。これにかんしましては、現在の専攻代表者〔＝ヴェーバー〕が——学部はその内容が知らされている——当時の退任願のなかで主張した論拠を参照できます。このことをまず申しあげ、新たに補任すべき国民経済学ポストのために、以下の人物をご推薦申しあげます。

I 正教授として以下の諸氏を(まずアルファベット順に配します)。

W・ハースバッハ<sup>(10)</sup>, キールの正教授, その前はケーニヒスベルクの助教授。——

同人の主要著作は学説史の領域に及んでおり——その方面には『ケスネーとアダム・スミスによって創設された国民経済学の哲学的基礎』<sup>(11)</sup>という著作が属します——, また社会史・農業史の領域にも及んでおります——この方面ではとくに『過去百年間におけるイギリスの農業労働者および囲い込み』<sup>(12)</sup>があります。——

カール・ラートゲン<sup>(13)</sup>, マールブルクの正教授, 以前は長期にわたって東京(日本)で教授として勤務しておりました。——

同人の主要著作としては次のものが傑出しております。『ドイツにおける市場の形成』<sup>(14)</sup>, さらに『日本の国家財政と国民経済』<sup>(15)</sup>, 最後に『イギリスの植民政策と植民

地』<sup>(16)</sup>。最近、同人はとくに商業政策の領域に関心を向けているようであります<sup>(17)</sup>。

ヴェルナー・ゾンバルト、プレスラウの助教授、以前はブレーメン商業会議所の法律顧問。——同人の数多くの著作は、経済史の領域——ここに属するのが『ローマ平原』<sup>(18)</sup>にかんする同人の処女作です——、工業政策の領域——とりわけ家内工業——、商業政策の領域——同人は社会政策学会のために「イタリアの商業政策」<sup>(19)</sup>を編纂しました——に及んでおり、最後に、そしてなによりも経済理論の領域に及んでおります。この領域に数えいれられるのが、とりわけマルクス体系の批判に向けた著作<sup>(20)</sup>であり、また出版予告されている著作『社会発展の理論』<sup>(21)</sup>のなかから公にされた（ブラウンス・アルヒーフ中の）断章<sup>(22)</sup>です（連続講演『十九世紀における社会主義と社会運動』<sup>(23)</sup>はまったく一般向けの著作です）。——

学部は、ここに掲げた諸氏全員を第一級の専門家と認め、その個々の長短を、あるいはまた全体としてその全著作を相互比較検討しようところをみることを欲しません。そうした試みは、そのもたらす結果に疑問が残るかもしれません。といいますのは、彼らのもっとも卓越した業績は、諸事実の抽象と概念的区分とに依拠しておりますから、まさにその業績は、歴史的に所与の現実にたいして、必然的に叙述と解釈との一面性をさまざまに明示しており、その一面性が際立って厳密な形式において述べられるならば、反論を惹起するのが当然だということが、経済学的考察法の本質に存するからであります。

それゆえ、当該諸氏にかんする以下の序列は、たんに、本学の目下の具体的諸事情から生じているような授業の利害によって定められたものであるにすぎません。この利害を顧慮して、私共はつぎのように定めます。

1 ヴェルナー・ゾンバルト教授を他の二名よりも前に置きます。その理由は、一方では、その研究領域が、現在の専攻代表者がたしかに復職することを見込みますと、この者の研究領域をじつによく補完して好都合だからであり、——またさらには、専攻代表者の門下生が同人の許でくりかえし研鑽を積んだ経験から、同人の授業能力、とりわけ門下生たちを彼ら自身の理論的・学問的考察へと導く能力は、まったく特別に恵まれたもので、こうしたやりかたにおいて他の者を寄せつけないからであります。

私共が、2 ラートゲン教授を先に挙げた者のつぎに置くのは、前述の理由からであり、またさらに、同人が、方法と一般の見解にかんしてはむしろ本質的に目下の専攻代表者と一致しており、専攻代表者の補完を〔ゾンバルトと〕同じ程度には果たさないからであります。とはいえ、同人の浩瀚な知識と冷徹な判断とに依拠した教育能力は、専攻代表者から、また他方面からも非常に好ましいものと述べられております。同人の招聘は、第一位の者のつぎに望ましい補任だと言えましょう。

最後に、先に挙げた二名のつぎに、3 ハースバッハ教授を置きます。たしかに、なによりも、すくなく専門外の聴衆が、同人の客観的に〔かつ〕高度に堅実な講演に接して得

た喜びにかんする非常に有利な情報がありますけれども、他方、専攻代表者が知るにいたったところによりますと、同人の教育活動の緊密度は、どうも専攻学生たちにとって他の二名と完全に同じ水準に達している保証はないようであります。しかしながら、同人もまた、あらゆる点で、補任すべきポストを占めるにふさわしいであろうことは疑いを容れません。

II 大公国貴省のご依頼に従いまして、さらに、若手学者グループのなかから、現在ベルリンの私講師であるカール・ヘルフェリヒ<sup>(24)</sup>博士をご推挙申しあげます。官庁資料に依拠している大部の処女作『帝国創設以来のドイツ貨幣制度の改革』(二卷)<sup>(25)</sup>は、正当にも「真に古典的」なものと特徴づけられており、それ以降に刊行されている同人の『貨幣制度と銀行制度にかんする研究』<sup>(26)</sup>もまた、同人が並々ならぬ才能ある若手研究者であることをしめしておりますし、こうしたことが前もって推測されるかぎりにおいては、同年代の者たちのなかで、たしかにもっとも学問的に有望でありましょう。

同人の教育活動については、その期間が短く、最終的な判断を下すのは不可能です。同人が弁舌の才を有していることは専攻代表者に知られております。また、教授資格を得てからの期間がもっと長い他の若手たちよりも、疑いもなく優位に立っているとみなしてよく、私共の見解では、同人の教育経験が短いゆえに正教授としての招聘を度外視する必要はまったくありません。また、これまでの検証によって、同人の正教授への昇格は安心して約束できますし、とりわけ、もしもただこれゆえにのみ他の者の招聘へと転じることがあるかもしれないのなら、そう約束できます。なんといいましても、大公国貴省の文書からも察せられますように、同人はすくなくともさしあたりどうやら〔員内〕助教授として獲得されるようであります。しかしこの場合、ヘルフェリヒ博士がすでに次の夏〔学期〕に着任することも考えられ、それでは、いずれの場合でも、同人が指導する学生の研究上の関心のためになお本学に勤務しているいまの正教授〔＝ヴェーバー〕によって、その〔＝ヴェーバーの〕職に就かせることも考えられ、そうした長所よりも、学部の見解では、最初に述べておいた懸念のほうが大きいと存じます。

学部長 O・クルジウス<sup>(27)</sup>

(V-3 未完)

〔注〕

- (1) *Neue Badische Schulzeitung* の計報(日付不明の切り抜き、103頁)によると、アルンスベルガー(1837-1907)は、ハイデルベルク大学に学び、1860年および1864年に国家試験に合格し、法務省事務局に入省し、1865年にハイデルベルク担当官に任命される。1871年に高等教育官としてカールスルーエの本省に戻り、いくつかの職務を担当した後、ヴィルヘルム・ノック指揮下の法務・文部省(後にこの省が分離再編されてからは文部省)で二十年にわたって科学・文化担当官として精勤する。1895年に枢密顧問官、1906年に枢密院顧問官に任命されている(GLA 235/3004 a)。彼の息子ヴァルター(1871-1902)は哲学の私講師として、ハンス(1872-1955)は内科医として、ルートヴィヒ(1877-1970)は外科医として、それぞれハイデルベルク大学および同

大学病院に勤務経験がある（Drüll 1986：5-6）。

- (2) その傍証はアルンスペルガー（Arnsperger）の名の誤記である。マリアンネは、彼の名を **Arnsberger** と誤記している（LB 1：254, 255, LB 2：277）。アルンスペルガーにずいぶん世話になっておきながら、彼の名を把握していないのである。このことは、彼女がああ伝記を執筆するさいに——また後年改訂するときにも——バーデン政府やハイデルベルク大学に保存されている公文書を参照しなかったことを露呈するものである。というのは、ヴェーバー関連の公文書中には、アルンスペルガーが作成し、署名したものが大量に含まれており、またそのなかにはタイプライターで **Arnsperger** と書かれているものも含まれているのであって、彼女がもしもこれを目にしていたならば、綴りをまちがえることなどありえないからである。
- (3) これらの書簡は当然『マックス・ヴェーバー全集』に収録されるべきものだが、2005年2月に、『全集』統括編集者のひとり M・ライナー・レプジウスに筆者が直接尋ねたところ、1905年以前のヴェーバーの書簡集を刊行するまで時間を要するとのことであった。また、本稿ですでに紹介した史料や、これから紹介する史料の多くは、編集者のあいだでもまだ知られていなかったようであり、したがって筆者が苦労して判読したことが徒労ではなかったことがわかった。要するに、筆者が発見し、カールスルーエの公文書館スタッフとともに判読したこれらの史料が、今後『全集』に収録されることになるのであろう。
- (4) 化学者ローベルト・ヴィルヘルム・ブンゼン（1811-99）は、ハイデルベルク大学哲学部が自然科学系の諸部門を包含していた時代にこの学部を担っていた。彼のポストは、1890年に自然科学・数学部が設置されたさいに、この新学部に移管された。つまり、残留哲学部側からみると、ブンゼンのポストは1890年に削減されてしまっていたことになる。
- (5) 厳密に言うと、自然科学・数学部は、哲学部から分離された部門・スタッフおよび医学部から分離された部門・スタッフから成っていた。
- (6) マリアンネは、この三通の書簡についてまったく言及していない。夫がこうした書簡を出していたことを知らなかったとも考えられる。
- (7) ゼミナール指導を代行し、俸給を経費補填に供するというのは、要するに、学生からゼミナール演習の受講料を徴収せず、ヴェーバーが自腹を切って処理するという意味である。なお、「拙下の俸給」が **meinen Gehalt** となっているのは **mein Gehalt** の誤記だと判断する。
- (8) 本稿の既述分において、ヴェーバーの「退職」と書いている箇所があるが、これらを訂正しなくてはならない。稿末正誤訂正参照。
- (9) 筆者が、ヴェーバーのハイデルベルク大学からの退職年を1918年・1919年のいずれかに特定しないことには理由がある。いま手許にある資料からは、どちらとすべきかまだ最終的判断を下すことができないのである。この点については、本稿の記述が1903年にさしかかったときに検討することにしたい。ひとつだけ指摘しておく、1918年2月1日付で、バーデン政府は、嘱託教授ヴェーバーにたいして休暇を許可している（UAH/PA 2408）。これはバーデン本省からハイデルベルク大学特別評議会にたいして下された公文書である。退職した人物にたいして休暇を許可するなどということはまったくありえないので、この時点において、ヴェーバーはなおハイデルベルク大学に在職していたと考えなくてはならないのである。
- (10) ヴィルヘルム・ハースバッハ（1849-1920）は、1899年に国家学教授としてキール大学に赴任し、結局亡くなるまでその職にあった。
- (11) Hasbach, W., *Die allgemeinen philosophischen Grundlagen der von F. Quesnay und Adam Smith begründeten politischen Ökonomie*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1890. 推薦書に記されている書名は正確でない。
- (12) Hasbach, W., *Die englischen Landarbeiter in den letzten hundert Jahren und die Einhegungen*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1894.



- (13) 日本で出版されているすべての人物事典類において、ラートゲン (1856–1921) の経歴は誤って伝えられているので注意されたい。まず生年月日が誤って記載されている。その理由は拙著中で指摘した (野崎敏郎 2005: 108–109)。また『岩波西洋人名辞典』の初版においては、彼が「マルデブルク大学」に勤務したと書かれていた。マールブルクとマグデブルクとが混同されている。そしてこの辞典が改訂されるときに「マグデブルク大学」に勤務したことにされて現在にいたっている。確率は二分の一だったが外れた。なお、この辞典においては著作名もまちがったままである。彼の経歴の詳細は拙著を参照。
- (14) Rathgen, K., *Die Entstehung der Märkte in Deutschland*. Darmstadt: G. Otto, 1881.
- (15) Rathgen, K., *Japans Volkswirtschaft und Staatshaushalt*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1891. 推薦書に記されている書名は正確でない。
- (16) Rathgen, K., *Englische Auswanderung und Auswanderungspolitik im neunzehnten Jahrhundert*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1896. 推薦書に記されている書名は正確でない。
- (17) ここで念頭に置かれているのはおそらく次の著述である。Rathgen, K., *Die soziale Bedeutung des Handels. Bericht über die Verhandlungen des siebenten Evangelisch-sozialen Kongresses, abgehalten zu Stuttgart am 28. und 29. Mai 1896*. Berlin: K. G. Wiegandt, 1896. 推薦書が書かれている1900年以降、ラートゲンは商業政策にかんするかなりの数の論文を書く。
- (18) Sombart, W., *Die römische Campagna; Eine sozialökonomische Studie*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1888.
- (19) Sombart, W., *Die Handelspolitik Italiens seit der Einigung des Königreichs. Die Handelspolitik der wichtigeren Kulturstaaten in den letzten Jahrzehnten*, Bd. 1. Leipzig: Duncker & Humblot, 1892.
- (20) Sombart, W., *Zur Kritik des ökonomischen Systems von Karl Marx. Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*, Bd. 7, 1894.
- (21) この著作は最終的に書名を変更して刊行される。Sombart, W., *Der moderne Kapitalismus*, Bd. 2. *Die Theorie der kapitalistischen Entwicklung*. Leipzig: Duncker & Humblot, 1902.
- (22) Sombart, W., *Die gewerbliche Arbeit und ihre Organisation. Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*, Bd. 14, 1899.
- (23) Sombart, W., *Sozialismus und soziale Bewegung im neunzehnten Jahrhundert*. Jena: G. Fischer, 1896.
- (24) ヘルフェリヒ (1872–1924) は、1890年から1894年までベルリン、ミュンヘン、シュトラースブルクで学び、1899年から1906年までベルリンで私講師として勤務している。これと並行して官界の職務をも担っており、1916年にペートマン＝ホルヴェークによって内務大臣に任命されたのをはじめ、戦時およびヴァイマル期の経済・財政問題とりわけ金融問題に取りくみつづけるが、1924年に鉄道事故で亡くなっている。
- (25) Helfferich, K., *Die Reform des deutschen Geldwesens nach der Gründung des Reiches*. 2 Bde. Leipzig: Duncker & Humblot, 1898.
- (26) Helfferich, K., *Studien über Geld- und Bankwesen*. Berlin: J. Guttentag, 1900.
- (27) 古典文献学者オットー・クルジウス (1857–1918) は、ライプツィヒ・トマス教会学校教諭、テュービンゲン大学教授等を経て、1898年にハイデルベルク大学に赴任した。1903年にはミュンヘン大学に転じている (Drüll 1986: 41)。

〔史料・文献〕

Doll, K. 1935: Adolf Kußmaul. A. Krieger u. K. Obser (hrsg.), *Badische Biographien, VI. Teil 1901–1910*. Heidelberg: C. Winter

- Drüll, D. 1986: *Heidelberger Gelehrtenlexikon 1803–1932*. Berlin: Springer
- GLA 235/2643: Grossherzogtum Baden. Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Diener Dr. Weber Karl Emil Maximilian. Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA 235/3004 a: Ohne Titel. [Verschiedene Akten über Ludwig Arnsperger.] Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA 235/3140: Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Dienst. Die Lehrkanzle der Staatswirtschaft, Finanz- und Polizeiwissenschaft, und die Besetzung der Bestellung. Nationalökonomie. 1821–1930. Teil 1. Generallandesarchiv Karlsruhe
- LB 1: Weber, Marianne 1926: *Max Weber; Ein Lebensbild*, 1. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck)
- LB 2: Weber, Marianne 1926/50: *Max Weber; Ein Lebensbild*, 2. Aufl. Heidelberg: Schneider
- UAH/PA 2408: Personalakten. Weber, Karl Emil Max 1897–1920. Universitätsarchiv Heidelberg
- 亀嶋庸一編（今野元訳）2005『回想のマックス・ウェーバー——同時代人の証言——』岩波書店
- 野崎敏郎 2005『カール・ラートゲンの日本社会論と日独の近代化構造に関する研究』（科研報告書）
- 八木紀一郎 2004『ウィーンの経済思想——メンガー兄弟から 20 世紀へ——』ミネルヴァ書房

〔第 39 号正誤訂正〕

- 47 頁下から 3 行目 誤 退職→正 正教授退任
- 58 頁上から 5 行目 誤 退職願→正 退任（降格）願

〔第 41 号正誤訂正〕

- 20 頁下から 3 行目 誤 6 月 25 日→正 7 月 25 日
- 21 頁上から 1 行目 誤 追認（二箇所）→正 承認
- 22 頁下から 4 行目 誤 「講ずるべからず」→正 「講義せず」
- 23 頁上から 2～3 行目 誤 6 月 25 日から…判然としない。別人の…→正 7 月 25 日から休暇に入り、講義を二週間分端折っている。なお、別人の…
- 29 頁下から 3 行目 誤 員外助教授→正 員内助教授
- 31 頁上から 7 行目 誤 6 月 24 日以前に打ち切り→正 7 月 22 日で打ち切り
- 31 頁上から 11 行目 誤 6 月 24 日以前に打ち切り→正 7 月 19 日で打ち切り
- 31 頁上から 15 行目 誤 6 月 24 日以前に打ち切り→正 7 月 20 日で打ち切り

〔付記〕

本稿は、佛教大学特別研究費の助成を受けた個人研究「カール・ラートゲンとマックス・ヴェーバーの社会理論と大学論に関する研究」（平成 17 年度）による研究成果の一部である。史料の提供および判読にさいしては、カールスルーエ総合公文書館およびハイデルベルク大学史料館のスタッフのご協力をいただいた。記して謝意を表する。

（のざき としろう 公共政策学科）  
2005 年 10 月 19 日受理